

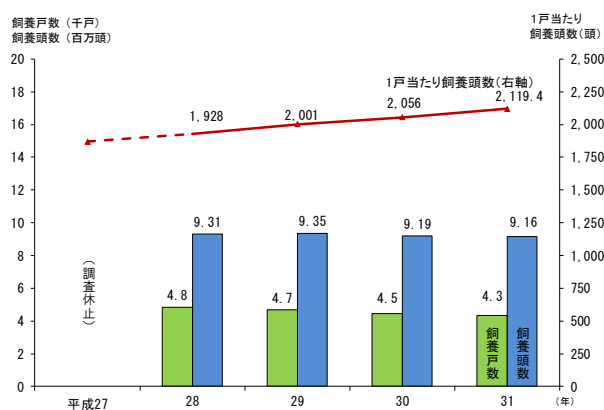
豚肉

◆飼養動向

31年2月現在の1戸当たり飼養頭数、前年比3.1%増

豚の飼養戸数は減少傾向で推移しており、平成31年は、4320戸（前年比3.4%減）と前年からやや減少した。総飼養頭数は、近年おおむね減少傾向で推移しており、31年は915万6000頭（同0.4%減）と前年からわずかに減少した。1戸当たり飼養頭数は、前年から63.7頭増加して2119.4頭（同3.1%増）となった。また、子取り用雌豚の1戸当たりの飼養頭数も同20.3頭増の246.6頭（同9.0%増）となった。小規模生産者を中心として飼養戸数が減少したものの、1戸当たり飼養頭数は増加し大規模化が進行している（図1）。

図1 豚の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」
注1：各年2月1日現在。なお、31年は概算値。
注2：平成27年は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

◆生産

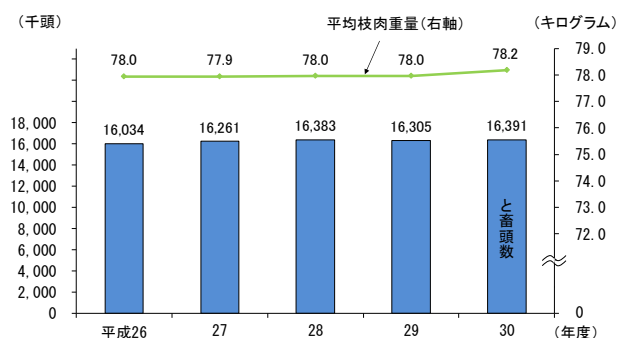
30年度の生産量、前年度比0.5%増

豚のと畜頭数は、平成26年度に流行した豚流行性下痢（以下「PED」という）の影響から減少したものの、その後は前年の夏場の猛暑による繁殖成績の低下などで減少した29年度を除き、おおむね増加傾向で推移している。

30年度は、猛暑の影響があったものの、生産者の大規模化が継続したことや、近年の豚枝肉卸売価格が高値で推移したことから、再び回復し1639万1294頭（前年度比0.5%増）と前年度をわずかに上回った。

また、同年度の1頭当たりの平均枝肉重量は、品種改良に加え、大型台風の影響で出荷が滞ったことなどにより78.2キログラムと前年度を0.2キログラム上回った（図2）。

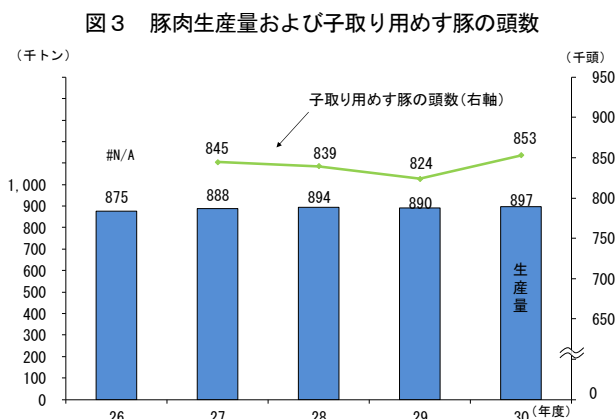
図2 豚のと畜頭数および平均枝肉重量



資料：農林水産省「食肉流通統計」
注：平均枝肉重量は全国平均。

生産量について、平成26年に発生したPEDの影響で減少したが、その後は夏場の暑さによる繁殖成績の低下などにより出荷頭数が減少した平成29年度を除き、おおむね増加傾向で推移している（図3）。

30年度は、と畜頭数及び枝肉重量の増加から89万7499トン（同0.8%増）と前年度をわずかに上回った（図3）。



資料：農林水産省「畜産統計」、「食肉流通統計」
 注1：生産量は、部分肉ベース。
 注2：子取り用めす豚の頭数は、各年2月1日現在。平成26年度は世界農林業センサスの調査年のためデータなし。

◆ 輸入

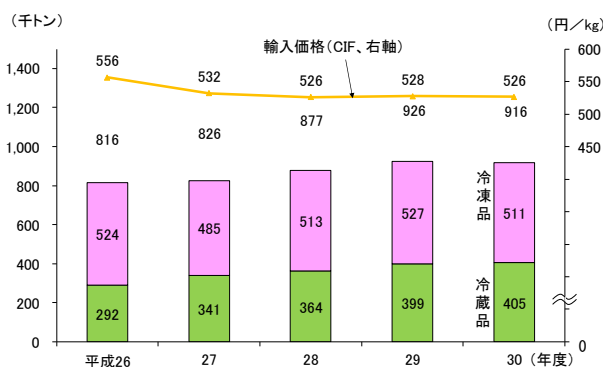
30年度の豚肉輸入量、前年度比1.0%減

豚肉

豚肉の輸入量について、国内の好調な需要を背景に、冷蔵品は、北米現地の高い輸出意欲などからおおむね増加傾向で推移している。冷凍品は、平成26年度の日本国内でのPEDの発生に伴い冷凍品輸入が急増した反動で、平成27年の冷凍品輸入量が減少したことを除き、EU諸国からの輸入量の増加や、カットなど技術面の向上によりメキシコ産などの輸入量が増えたこともあり、おおむね増加傾向で推移している（図4）。

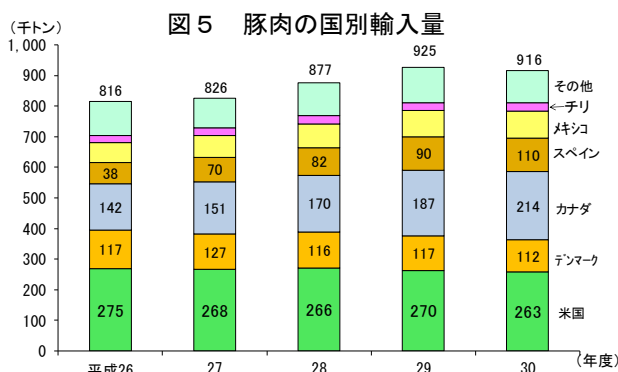
平成30年度は、91万6172トン（前年度比1.0%減）と前年度をわずかに下回った。このうち、冷蔵品は堅調な需要を背景に、40万5357トン（同1.6%増）と前年度をわずかに上回ったが、冷凍品は、前年度末に潤沢に存在していた国内在庫を消化したことにより、51万794トン（同3.0%減）と前年度をやや下回った（図4）。

図4 豚肉の冷蔵品、冷凍品別輸入量および輸入価格



資料：財務省「貿易統計」
 注：部分肉ベース。

30年度の国別輸入量は、米国产が25万8453トン（同1.8%減）、デンマーク産が10万3920トン（同7.4%減）と前年度から減少した一方、カナダ産は22万3342トン（同4.3%増）、スペイン産は10万9433トン（同0.7%減）、メキシコ産は8万9369トン（同4.4%増）と前年度から増加した（図5）。



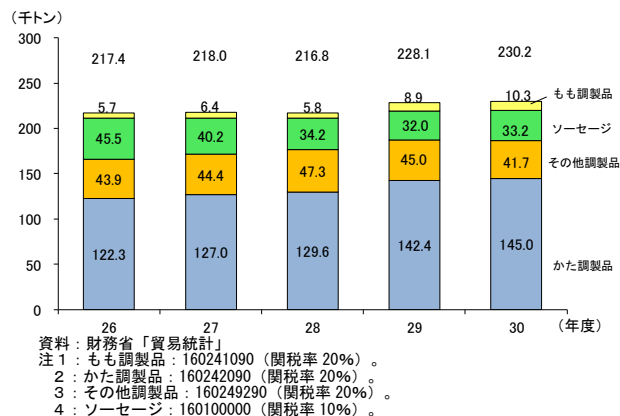
資料：財務省「貿易統計」
 注：部分肉ベース。

豚肉調製品・ソーセージ

豚肉調製品やソーセージの輸入量については、底堅い需要を背景とし、現地相場に伴う増減を繰り返しながらもおおむね増加傾向で推移している。

30年度は、豚肉調製品の底堅い需要が続く中、人件費の高騰などにより一次加工品への引き合いが増加したことでかた調製品の輸入が好調に推移していることや、ソーセージの輸入量が6年ぶりに前年を上回ったことなどから、合計で23万167トン（前年度比0.9%増）と4年連続で前年度を上回った（図6）。

図6 豚肉調製品およびソーセージの輸入量



◆消費

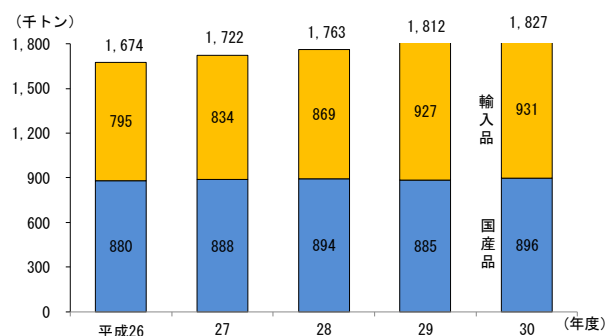
30年度の推定出回り量は前年度比0.9%増、家計消費量は同3.9%増

推定出回り量

豚肉の推定出回り量は、近年の好調な豚肉消費を背景に増加傾向で推移している。平成27年度、28年度は牛肉需給の引き締めを受け、豚肉の需要が増加し、29年度も肉ブームなどを背景に好調に推移した。

30年度は、国産品は89万6042トン（前年度比1.3%増）と前年度からわずかに増加し、輸入品は93万1404トン（同0.5%増）と前年度からわずかに増加した。この結果、全体では182万7446トン（同0.9%増）と前年度からわずかに増加した。なお、合計に占める国産品の割合は49.0%（同0.2ポイント増）となり、29年度から5割を下回っている（図7）。

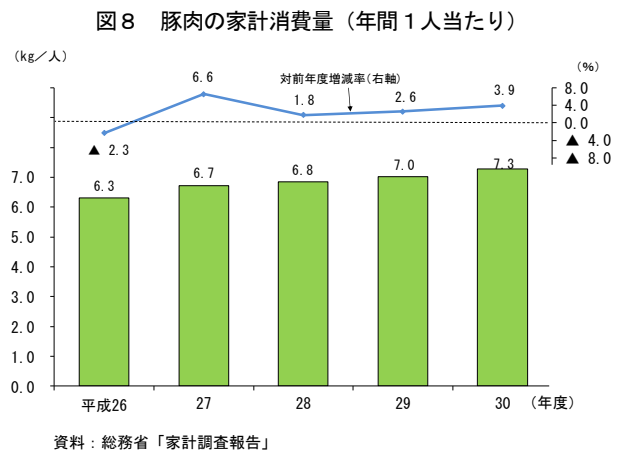
図7 豚肉の推定出回り量



資料：農畜産業振興機構推計
 注：部分肉ベース。

家計消費

豚肉消費の約5割を占める家計消費について、年間1人当たりの豚肉の家計消費量を見ると、家庭における好調な豚肉需要を背景に、平成30年度は、年間1人当たり7.3キログラム（前年度比3.9%増）と4年連続で前年度を上回った（図8）。

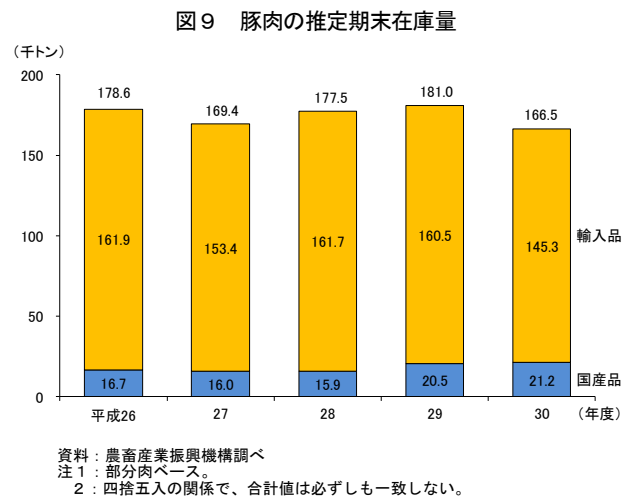


◆在庫

30年度の推定期末在庫量、前年度比1.9%増加

豚肉の推定期末在庫量については、約9割を輸入品が占めており、そのうち9割強を冷凍品が占めている。このことから、推定期末在庫は輸入量や生産量の影響を受け、増減を繰り返しながら推移している。

平成30年度は、国産品は2万1221トン（前年度比3.6%増）と前年度を上回った一方、輸入品は、潤沢な在庫の解消が優先され、輸入業者が輸入を控えたことにより、14万5268トン（同9.5%減）となった結果、合計では16万6489トン（同8.0%減）と前年度を下回って推移した（図9）。

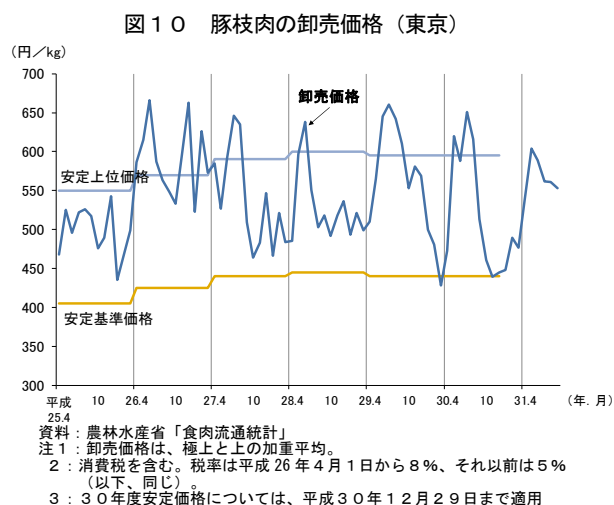


◆ 枝肉卸売価格

30年度の枝肉卸売価格、7.6%安

豚枝肉卸売価格（東京・極上、上加重平均）は、出荷頭数が少なくなる春から夏にかけて上昇基調で推移し、出荷頭数の増加する秋ごろに低下する傾向にある。

平成30年度は、年度前半は前年度と同水準で推移していたが、9月下旬からと畜頭数や枝重の増加による生産量増加などにより、低下傾向で推移した。この結果、年度平均では1キログラム当たり519円（前年度比7.6%安）となった（図10）。



◆ 小売価格

30年度の小売価格、国産品、輸入品ともに上昇

豚肉の小売価格（ロース）について、平成30年度は、国産品は、生産量は増加したものの、家計消費が好調に推移したことなどから、100グラム当たり271円と（前年度比0.7%高）とわずかに上昇した。輸入品は、国産品の価格が堅調に推移する中で、輸入品への引き合いが強まったことから、同153円（同4.8%高）と前年度をやや上回った（図11）。

